

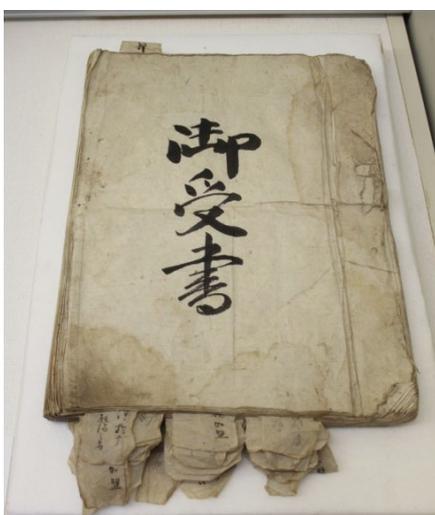
## 炉辺夜話「会津藩士 余市入植に関わる資料について」

小川 康和(余市水産博物館 学芸員)

余市町は豊かな自然に囲まれ、古くから人が住み続けてきており、先人たちの残した遺産として数多くの文化財が存在しています。また、漁業・農業を基盤として発展してきた歴史があり、これらに関わる資料も貴重な文化財のうちに数えられます。これらの文化財は後世へ受け継ぐために保存される一方、教育的な活用のほか、研究対象や観光資源として注目されてきました。現在国指定文化財4軒、北海道指定文化財2軒、余市町指定文化財 34件を数えます。

これらの中で、農業特に現在の果樹栽培の基礎を築いた会津藩士の余市入植に関わるものを、歴史の概略に触れながら紹介したいと思います。

慶応4(1868)年の鳥羽・伏見の戦いに始まる戊辰戦争において、幕府軍の関係諸藩が次々と脱退・降伏する中で最後まで戦った会津藩でしたが、討幕軍との激戦の末に降伏し、ついに廃藩と至りました。敗残の旧会津藩



御受書

士たちは「朝敵」や「逆賊」の汚名を着せられ、捕虜のような謹慎生活を送った後、蝦夷地行きを命ぜられました。明治2(1869)年の小樽到着後もしばらくは移住先が決まらず、余市郡移住決定は翌年まで待たなければなりません。この余市郡への移住決定後に旧会津藩士団が「朝敵」の汚名をそそぐ固い決意を表し、227名の名を記し血判を押して開拓使へ提出したのが「御受書」です。その副本と思われるものが余市町指定文化財となっており、余市水産博物館に展示されています。

士族から農民へと立場が変わった旧会津藩士たちは、御受書に記した決意の下、腰に差していた刀を斧や鍬、鋤等の農具に持ち替え、周囲からの「会津降伏人」の蔑視に耐えながら、荒地を耕し開墾に励みました。しかし見知らぬ土地での厳しい自然下での重労働は過酷で、成果がすぐには表れない苦しい生活が続く中、明治12(1879)年に少量ながらリンゴが結実、その後「余市リンゴ」は名声を博し、余市地方周辺の果樹

栽培の基礎を築くこととなりました。

その苦勞を偲び、大正9(1920)年に余市入植五十周年を記念して旧会津藩関係者により建立され、余市町



指定文化財に指定されているのが、「開村記念碑」です。石碑が建てられている付近は、かつて藩士団の幹部住宅や教学所、共同浴場などがあった場所で、その通りは「侍小路」の名で親しまれていました。石碑の横には昭和59(1984)年に会津藩最後の藩主である松平容保公の孫にあたる松平勇雄福島県知事が来町した際に、オンコが植樹されました。また、道路を挟んだ筋向かいには、戊辰戦争の責任者として処刑された会津藩家老の萱野権兵衛を偲び、同じく旧会津藩関係者により昭和12(1937)年に「殉節碑」が建立されました。

これらは、余市町はもちろんの事、明治期における北海道開拓、その後の農業の発展を語る上で、不可欠且つ貴重な資料となっています。